

犬山城 天守

犬山城の天守は、古い様式を保つ一つである。国宝に指定されている5つの天守のうちの最古のものであり、戦争、自然災害、国による廃城令を免れた城です。

犬山城は1537年、地域の武将が領土をめぐって絶えず軍事紛争を繰り返していた時期に織田信康（生年不詳—1544年。織田信長の叔父）により築城されました。戦国時代には城に多くの歴史が刻まれ、戦国武士が剣や弓を使い土地を守った時代でした。

木曾川を見下ろし、今日の愛知県と岐阜県にまたがる城の戦略的な場所は、犬山城が多くの重要な戦いの最前線にあったことを意味し、したがって、領主は、織田信長

（1534-1582）、豊臣秀吉（1536-1598）と徳川家康（1542-1616）の体制支持者の間でしばしば変わりました。

家康の時代以降、成瀬氏は1617年から400年近く城を所有していたが、明治天皇が近代化の推進の一環として多くの城を廃止するよう命じた1873年に、その所有権に比較的短い中断がありました。城の存続は、犬山の人々が公園として再分類するために集まったため、部分的には1891年の強力な地震による被害を修復することを条件に、1895年に成瀬氏に返還されました。城は公益財団法人犬山城白帝文庫の所有となるまで、日本では珍しく2004年まで個人所有のままでした。